

## 「題葉譚」 逍遙

鈴木 元

一、御溝ノ葉をめぐつて

二、題葉譚の諸相

三、本邦での受容をめぐる問題

室町期の禅林に流行した聯句にかかわる知識の一つに、紅葉に詩を書いて流した女性が、それを拾った男と数奇なめぐり会いを果す話がある。ところが、この一話の典拠を探索する中で、もともとなつた中国の文献においても、実に様々なヴァリエーションがあつたことが浮かび上がる。しかも、それら類話が交錯しあいながら、本邦に流れ込んだ形跡があり、単純な本説、典拠としては処理しえない点がある。和歌や連歌とかかわる知識でもあり、この一話の受容については、慎重な検討が必要である。ここでは禅林を中心に、問題の所在を描き出すことに努めた。

かつて、深宮の内より一ひらの色うつくしきもみじ葉が流れ出た。紅葉は、宮女の人知れぬ憂いをのせ、水の流れて漂うたのだという。

ことの緒は、『連歌新式』付載「和漢篇」。「和漢篇」、あるいは『漢和法式』は、和漢漢和聯句のために定められた、極く初歩的な約束事を記しとどめたものであり、例えば、「聯句中可定其季等字事」とする一項には、各々の語句を用いる際に注意すべき、その語句の属性に言及するのである。次に掲げるのはその一部。

錦字、御溝葉、私語 如此類可為恋也

但し、「錦字」一つをとつても、「恋」を表す前提の知識がここでは省略されており、その前提をふまえない者には殆ど意味を為さない語句が、そこには含まれている。続く「御溝葉」の語についても事情は同じであり、以下はこの「御溝ノ葉」と、そこに記されていた詩をめぐる一話について、諸資料の間を巡り歩くことで浮かび上がった、幾つかの問題の点綴である。

連歌愛好者の飛躍的な広がりに伴い、式目についての講釈が盛んに行われたのであろう、永祿年間あたりから、連

歌新式についての多くの「抄」や「聞書」が現れる<sup>(1)</sup>。講釈は、時にこうした聯句用語彙に及んだものと思われる。「御溝ノ葉」につき、「是モ、唐ノ大裏ニ、カハ水ヘ、木葉ニ物ヲ書テ、思フ人ノ方ヘ流シテヤリシ事也」(『連歌新式前注』<sup>(2)</sup>)とは、一語の標準的な理解の有りようを示すものと評し得るであろうが、具体性には欠ける。詳細を知るためには、次の『新式聞書』あたりまでの説明が必要とされる。

御溝ノ葉 恋也、モロコシニ紅葉ニ詩ヲ書テ禁中ノ御溝ニナカシ侍ルコト也、紅葉良媒ト云古事有、奥ニ書也、

年中行事哥合ノ歌ニ寄御溝水ニ恋

なかれての名にやたてなん紅の一葉をうけし水莖の跡

排韻 紅葉良媒 言ハ韓夫人ト云者、紅葉ニ題レ詩ヲ放テ御溝ニ、御溝トハ内裡溝シテ祐ト云者、拾レ此詩、祐又葉ニ題レ詩ヲ、溝カ逆流シテ放レ溝ニ、韓夫人カ処ニ至タルト也、然シテ韓夫人嫁レ祐ヲ之此意ヲ韓夫人カ詩ニ曰、一聯佳句題流水ニ、十載ノ幽思満素懷ニ、今日却テ成鸞鳳ノ友ト、方ニ知ル紅葉是媒ナルコトヲ、言ハ一聯ノ佳句、ミミトハ是ハ前ニ作リタル詩ノコト也、二ノ句ハ韓カ十年以来心ノ内ニテ祐ヲ恋スルコト

也、素懷トハ、素ハモトヨリト読ソ、年来久ク物ヲ思フコトヲ素懷ト云、鸞鳳友トハ、鸞モ鳳モ齊レ名鳥也、今韓ト与祐匹偶シテ夫婦ト成タル処ヲ云、是ハ人ノ媒介ニテハ無テ紅葉ニ題詩ヲノコト也、故ニ紅葉カ是良媒ナルト也、是ヲ排韻ニ紅葉之縁トスル也、于トモ祐トモ切ヘシ、桐葉ニ題レ詩ヲ為娘ヲ者モアリ、拾葉ヲ題紅怨一、于祐カ紅怨ト作タリ

(京都大学附属図書館蔵平松家本)

さて、はじめに引かれる「年中行事哥合」の歌(二条良基の作)については、ここでは詳述しない。ただし、この歌合は連歌師たちに重用されたもので、紹巴の連歌新式注あたりを見ても、一条兼良の『公事根源』などと併せ、頻繁に引用を見るものである点は了解しておく必要がある。次いで、ここでは「排韻」を引いて、一語の背景を明かしており、理解のもとになる典拠が明示されている。いま内閣文庫蔵の五山版『新編排韻増広事類氏族大全』を示し、対照しておく。

### 紅葉之縁

韓夫人者唐僖宗宮女也、嘗題紅葉云、流水何大急、深宮尽日閑、殷勤謝紅葉、好去到人間、放御溝中、有士人于祐拾得、就題一葉云、曾聞葉上題紅怨、葉上題詩寄阿誰、溝逆流、韓夫人拾得、後帝放宮人、時祐託韓

泳門館、泳以韓夫人有同姓之親、作伐嫁祐、及成礼各示所得葉、韓泣曰、事豈偶然、莫非前定、泳開宴曰、今日可謝媒、韓笑荅曰、一聯佳句題流水、十載幽思滿素懷、今日却成鸞鳳友、方知紅葉是良媒

(二十五「寒」韻)

この「排韻」の伝来時期は厳密には定かでないが、室町時代を通じて禅僧の基礎文献であつた。しかもこのような、詩作に必要な知識であるならば、「排韻」の他にも様々な詩作用の文献を通じ、禅林に広まっていたであろう。例えば「韻府群玉」。その巻二十八声葉韻には、「題紅葉」の語を掲げ、

唐僖宗時、于祐於御溝中拾一紅葉、題詩云、流水何太急云云、祐題一葉云、曾聞葉上一一怨、一上題詩寄阿誰、置溝上流、宮女韓夫人拾之、後祐托韓泳門館、因帝放宮女三千人、泳作伐嫁祐、及成礼各於箚中取紅葉相示乃曰、事豈偶然、一日泳開宴曰、子二人可謝媒人、韓氏曰、一聯佳句隨流水、十載幽思滿素懷、今日却成鸞鳳友、方知紅葉是良媒、泳笑

と、『排韻』にはば一致する話を記している。<sup>(1)</sup>『韻府群玉』掲載の詩語は、詩や聯句は無論、時に連歌や和歌に素材を提供する宋代小説の世界を、しばしば垣間見せてくれる。しかも、類書に近いその性格から、単に辞書として引くだ

けでなく、暇にまかせては通覧される類の書物であつただらう。

この『韻府群玉』の抄物に、惟高妙安譜の『玉塵』がある。こうした講義記録の存在にも、この韻引き辞書の享受の裾野が窺われる。さて『玉塵』は、『韻府群玉』平声灰韻「紅葉媒」の語を注して、

韓夫人ト云女、宮中ニミヤツカウ、紅葉ノヲチタニ詩ヲカイト、宮中ノ津エステタレハ、水カ流テ、ソトエイタウ人カヒロウテ又詩ヲカイト水ニ浮タレハ、宮中エイタソ、ノチニ夫婦ニナツタソ、排勻ノ韓ノ所ニアリ

(国立国会図書館蔵本卷二十一、抄物大系)  
と記しており、やはり「排韻」が知識の源泉にあつたことを知らしめている。また、詩作のための類書の一つ『増広事聯詩学大成』でも、卷六の「秋水」の項には「流紅葉」の語に注して、「明皇宮人、題紅葉詩、一水何太急、深宮尽日閑、殷勤謝——、好去到人間」と、一話の理解を前提とする「宮人」の詩が抜き出されていた。

『韻府群玉』『詩学大成』ともに、かなり早い時点で本邦に流入を見たようで、既に義堂周信の時代には重宝された書物であつただらう。とすれば、義堂の詩文集『空華集』卷三に、「次ニ韻国清円天鑑」として収める七絶三首中の一つ、

病夫懶<sup>レ</sup>著<sup>ル</sup>ニ遊山ノ履<sup>一</sup> 閑臥<sup>シテ</sup>空吟<sup>ス</sup>樂道ノ歌  
不<sup>レ</sup>奈<sup>ト</sup>国清寒拾<sup>一</sup>輩 題<sup>ニ</sup>詩<sup>ヲ</sup>紅葉<sup>ニ</sup>惱<sup>レ</sup>コト人<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>コトヲ

(五山文学全集)

傍線部の如き表現の背景に、記述の一話を読むことも可能かと思われる。この点は、『新式聞書』に引用された『年中行事歌合』の一首と思い合わせて、注意しなければならぬところである。さて、同じく惟高妙安の『詩学大成抄』では、以下のごとく長い解説が続く。繁雜とも思われるが、細部の確認の意も含めて、省略はしない。

流紅葉ハ、秋水ノ所ニ出ナリ、溪水ノコトテハナイソ、サレドモコ、ニシルス也、大成ニハ、明皇ノ宮人<sup>カ</sup>、紅葉ニ詩<sup>ヲ</sup>作<sup>テ</sup>水ニナガイタトシタソ、宮人ト云ハ宮女也、天子ニミヤツカイスル<sup>ヲ</sup>云也、此事ハ、排韻ノ韓ノ字ノ所ニ、韓夫人ハ唐僖宗ノ宮女トスルソ、アル時紅葉ニ一首ノ詩ヲ内裏ノ中ノ溝ノ流ニウカベタソ、ソノ詩ニ、流水何<sup>ソ</sup>太<sup>ク</sup>急<sup>ナル</sup>、深宮<sup>ヒネメス</sup>尽日閑<sup>ナリ</sup>、殷勤<sup>イイシク</sup>謝<sup>ス</sup>紅葉ニ、好<sup>シ</sup>去<sup>テ</sup>到<sup>ル</sup>人間ニ、此五言ノ詩ノ心ハ内裏ノフカイ宮ノウチニ、ミヤツカウ身ナレバ、ドコヘモ立<sup>チ</sup>出<sup>モ</sup>エセヌソ、吾ハ、ツナガレタヤウナソ、此水ハ、イソガワシウ、思イノマ、ニ流テ、ユキタイ所ヘイテ、アイタイ人ニモアウソ、ケナリイコトソ、吾ハヒトリフカイ宮中ニシツカニ、モノヲ思テイルソ、

慇<sup>イ</sup>ハ、ネンコロノ心ソ、此ノモミヂノ葉ヲタノムソ、  
謝<sup>スル</sup>トハ、礼ヲ云心ソ、カマイテ、此宮中ヲ流<sup>レ</sup>  
出<sup>テ</sup>、人間エイテ、葉ニ詩ヲカイタホドニ、此詩ヲミ  
タラハ、タソ我ヲ思人アラウスホドニソ、人間ニ、ホ  
ウコウヲトコニ于祐ト云者ヒロウタソ、祐<sup>カ</sup>又葉ニ、  
七言ノ詩ヲ二句作テカイタレハ、御溝ノ水<sup>カ</sup>サカサマ  
ニアトエ流テ、宮中エモトリタソ、韓夫人<sup>カ</sup>ヒロウテ  
トツタソ、ソノ詩ハ、曾<sup>テ</sup>聞葉上題ニト紅怨<sup>ニ</sup>、葉上  
題<sup>レシテ</sup>詩<sup>ヲ</sup>寄<sup>ヨス</sup>ニ阿誰<sup>ニカ</sup>、宮女ノ紅葉ニ詩ヲ作テカ、レ  
タトハ、キイタソ、紅怨トハ、吾<sup>カ</sup>心ニ思<sup>ウ</sup>コトソ、  
怨ハ恋<sup>コイ</sup>ノ心ソ、心ハアカイホトニ、紅心トモ、丹心ト  
モ云ソ、心ノハラノ中ト云心ソ、マコト、云心ソ、葉  
上ニ詩ヲハカイテ流シタガ、誰<sup>カ</sup>方エ寄ウトカ、思ワ  
ル、ラウ、アヂキナイコトソ、アワレ吾<sup>ニ</sup>ヨセラレヨ  
カシト云心ソ、此ノ事ヲ王ノ御キ、アリテ、宮女ヲユ  
ルシテ、タレニナリトモ縁ニナレトユルシガ出ソ、于  
祐ハソノ時韓泳ト云官人ノ与<sup>ヨリ</sup>力デアリタソ、夫人モ韓  
泳ト一門一姓ノ女房也、泳ガトリモツテ、夫人ヲ于  
祐<sup>カ</sup>女房ニナシテ、泳<sup>ガ</sup>シタテ、ヨメ入<sup>リ</sup>、祝言<sup>ヲ</sup>ノ  
礼<sup>ヲ</sup>ト、ノヘテアルソ、泳<sup>ガ</sup>酒肴<sup>ヲ</sup>ト、ノエテ、大サ  
ガモリヲシタソ、夫人カ又詩ヲ作<sup>ニ</sup>、一聯ノ佳句題<sup>ニ</sup>  
流水ニ、十載<sup>ヲ</sup>ノ幽思滿<sup>ニ</sup>素懷ニ、チャツト詩ヲ一聯ツ

クリテ、葉ヲ水ニナガイタソ、此十年ハカリ人ヲコイ  
テ、心ノ中ニ人シラス腹中ニ一ハイモチタソ、今日  
却<sup>テ</sup>成<sup>ル</sup>変鳳ノ友ト、方<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>紅葉ハ是<sup>レ</sup>良媒<sup>ナ</sup>、  
十年ハカリ、レンノコイシノウタレハ、縁アレハ、  
ケウ夫婦トナリタソ、鸞鳳ハ、アイハナレヌ鳥ソ、鴛  
鴦ノツレナリ、方知ハ、マコトニヲモイシラレタソ、  
此ノ紅葉ハ、人ノ夫婦ノアイダノヨイ媒<sup>ナ</sup>、媒ハ、人  
ガスルモノナリ、此ハ葉カ媒ニナリタソ、紅葉ノ詩ヲ  
二十八字ノ詩媒トモ云ソ、葉媒トモスルソ、此ノ事ヲ  
ネンコロニシルシタラ、流紅記ト名タソ、方輿勝覽ヤ  
ラニアルソ

幾つか注意を要する所もあるので、私注を交えながら進め  
ていこう。冒頭に指摘する『排韻』は、やはり直接の典拠  
を示したものであろう。于祐の詩を載せ、「御溝ノ水カ、  
サカサマニアトエ流テ、宮中エモトリタソ」とあるのは、  
『排韻』の「溝逆流」に應ずるものであり、前引「韻府群  
玉」の「置溝上流」によるものではない。ただ、『韻府群  
玉』の複雑な諸伝本の異同を考えれば、諸本対称を俟つて  
しか、いかほどのことも言い得ないが、于祐の和した詩に  
二つの「流れ」があつた点のみ注意しておきたい。

末尾には「方輿勝覽」の名をも掲げているが、但しこち  
らは、その口ぶりからしても直接確認していたか心とな

い。それよりも注意したいのは、「流紅記」の名の方。記述のつながりからは、「方輿勝覽ヤラ」で目にした作品名ということのようであるが、『方輿勝覽』では、まだこの小説の引用を確認できていない。が、確かに『排韻』などの引くこの話が、もと「流紅記」と称されていたことは、宋の劉斧撰輯になる『青瑣高議』巻五を見ても確かめられる。『青瑣高議』所収「流紅記」は、『排韻』などに較べさらに詳しいが、本邦での受容ということを問題にする際には、取り敢えず、考慮の外に置いてよいであろう。参考までに確認しておけば、『青瑣高議』では、木の葉は「置御溝上流水中」とされていた。

「抄」が注意を促しているように、『詩学大成』が「唐僖宗宮女」ならぬ「明皇宮人」とすることについては、先に掲げた通りだが、この点は後でふれることとなる。『詩学大成抄』末尾近く、「二十八字ノ詩媒」は、『韻府群玉』所載の「二十八字媒」なる語を思わせるけれども、本話とはかかわらないようだ。詩による仲立ちという話題からの類推か、あるいは誤解があつたものか。

## 二

さて、これまで挙げてきた資料では、「御溝」を流れてきた木の葉は、皆「様に「紅葉」とされていた。その点、

『新式聞書』末尾に「桐葉ニ題レ詩ヲ為姫ヲ者モアリ」とは異例とも見える。しかしこれも、錯綜する類話群の間に見られる異同の一隅にしか過ぎない。以下、木の葉に記された詩を介しての邂逅という話型を有する一連の話を、「題葉譚」と称する。この題葉譚を最も簡潔にまとめているのは、本邦での受容について審らかでないが、宋の龐元英撰「談薮」であろう。明の郎瑛撰『七修類稿』巻十九や、清代考証学の成果、趙翼の『陔余叢考』巻三十九「御溝流葉凡四見」も、「談薮」を引きながら、その枠内の記事を有するのみである。<sup>11)</sup>

『談薮』は、まず「唐小説記紅葉事凡四」<sup>12)</sup>として、本事詩、雲溪友議、北夢瑣言、玉溪編事の四書を紹介している。以下、順次その本文を検討するが、本邦での受容という観点から、右四書については「談薮」に拠らず、テキストは基本的に『太平広記』<sup>13)</sup>所収のものによることとし、必要に応じ他の本文を参照する。まず、『本事詩』（顧況）と『雲溪友議』（盧渥）は、『太平広記』巻一九八に並んで掲げられている。

### 顧況

唐顧況在洛、乘間与一二詩友遊於苑中、流水上得大梧葉、上題詩曰、一入深宮裏、年年不見春、聊題一片葉、寄与有情人、況明日於上游、亦題葉上、泛於波中、詩

曰、愁見鶯啼柳絮飛、上陽宮女斷腸時、君恩不禁東流水、葉上題詩寄與誰、後十日余、有客來苑中尋春、又於葉上得一詩、故以示況、詩曰、一葉題詩出禁城、誰人愁和独含情、自嗟不及波中葉、蕩漾乘風取次行 出本事詩

### 盧渥

中書舍人盧渥、應舉之歲、偶臨御溝、見一紅葉、命僕拿來、葉上及有一絕句、置於巾箱、或呈於同志、及宣宗既省宮人、初下詔、許從百官司吏、独不許貢舉人、渥後亦一任范陽、独獲其退宮人、觀紅葉而吁怨久之曰、當時偶題隨流、不謂郎君收藏巾篋、驗其書跡、無不訝焉、詩曰、流水何太急、深宮尽日間、殷勤謝紅葉、好去到人間 出雲溪友議

まずは顧況の伝(『本事詩』)から見てゆくならば、「排韻」系の于祐伝と比べると、人名もさることながら、「流水上得ニ梧葉」としていることは、先にふれた『新式聞書』の「桐葉」の説ともかわかるものとして注意される(『新撰字鏡』に「梧 支利乃木」「桐 支利乃木」)。次に盧渥の伝(『雲溪友議』)だが、注意しなければならないのは、「雲溪友議」は本来、顧況、盧渥の二伝を有する点で、『太平広記』巻一九八には、右の本事詩の記事と並べて掲げられる故か、盧渥のみを載せている。ただし『雲溪友

議」の顧況伝は「明皇時……」として語り出され、これは先の『増広事聯詩学大成』の注記とかかわるものである。また盧渥が「御溝」中の「紅葉」に見た詩は、「流水何太急」云々と、これは「排韻」等の説に一致する。

次の『北夢瑣言』は「李茵」の事として、これを伝える。

進士李茵、襄陽人、嘗遊苑中、見紅葉自御溝流出、上題詩云、流水何太急、深宮尽日閑、殷勤謝紅葉、好去到人間、茵收貯書囊、後僖宗幸蜀、茵奔竄南山民家、見一宮娥、自云宮中侍書、名雲芳子、有才思、茵与之款接、因見紅葉、嘆曰、此妾所題也、同行詣蜀、具述宮中之事、及綿州、逢内官田大人識之、曰、書家何得在此、逼令上馬、与之前去、李甚快悵、其夕、宿逆旅、雲芳復至、曰、妾已重賂中官、求得從君矣、乃与俱歸襄陽、数年、李茵疾瘠、有道士言其面有邪氣、雲芳子自陳、往年綿竹相遇、実已自經而死、感君之意、故相從耳、人鬼殊途、何敢貽患於君、置酒賦詩、告辞而去矣 出北夢瑣言

〔太平広記〕卷三五四

後半部の展開は全く異なるけれども、ここでも御溝を流れてきた紅葉の詩は、盧渥の場合と同じである。しかも、「僖宗」の名を挙げるところは注意されよう。「青瑣高議」所収「流紅記」は、こうした唐代小説を基礎に脚色を加えたものと見て誤らない。「劉斧青瑣中有御溝流紅葉記、

最為鄙妄、蓋竊取前說而易其名爲于祐」（『談薮』）と評される所以である。また『談薮』の記事でもう一つ注意しておきたいのは、右に続け「本朝詞人罕用此事」と述べる点で、「まれ（罕）」<sup>19</sup>というのがどの程度のものか、「此事」が指すのは「青瑣中」の「記」のみかどうか、定かではないけれども、宋代の詩人たちの間に、于祐の伝がひろまっていたことを確認させてくれる。

<sup>19</sup>これに対し、『玉溪編事』の伝えるところは趣を異にする。

侯繼図尚書本儒素之家、手不釈卷、口不停吟、秋風四起、方倚檻於大慈寺樓、忽有木葉飄然而墜、上有詩曰、拭翠斂双蛾、為鬱心中事、擲管下庭除、書成相思字、此字不書石、此字不書紙、書向秋葉上、願逐秋風起、天下負心人、尽解相思死、後貯巾篋、凡五六年、旋与任氏為婚、嘗念此詩、任氏曰、此是書葉詩、時在左綿書、爭得至此、侯以今書弁驗、与葉上無異也 出玉溪編事

『太平広記』卷一六〇

後半部分は、私には異を解し難い記述であり、不確かな理解となるかもしれないが、詩をなかだちとした巡り逢いという点では同工としてよいであろう。ただし、詩も設定も既述のものとは異なり、それ故、特に問題とするには及ばないとも思われようが、侯繼図の名は『韻府群玉』卷二十

入声葉韻で、「題紅葉」と並ぶ「題桐葉」の語に付された注に見えていた。

蜀侯繼図見飄一大桐葉、有詩云、拭翠斂双蛾、為鬱心中事、擲管下庭除、書成相思字、数年、繼図昏任氏、曰、是妾所書也「商芸小説」

そこでは侯繼図が手にしたのは「一大桐葉」であり、典拠も「商芸小説」とされ、直接「玉溪編事」によるものではないようだが、前後の記述はほぼ『玉溪編事』を承けるものと見て誤りない。また、「一大桐葉」は当然ながら「大梧葉」（『本事詩』）を思い起こさせる。

これも本邦中世末の例ではあるが、『翰林五鳳集』卷十九秋部所収の「桐葉題詩」（目録では「桐葉題詩」）題に、落梧片片報秋来、一葉題詩代楮材、幸有繡林鳳雛在、為吾喚去作良媒

熙春

との一首を収め、また「宮梧報秋」題の詩に、

矮屋炎天暑未収、宮梧風度夜涼浮、愁人却喜秋色早、

葉上題詩列御溝

春沢

と表現されるのは、桐の葉からも『排韻』、もしくはそれに近い題葉譚が連想されていた痕跡であろうかと思う。<sup>17</sup>勿論、題葉譚そのものを主題とした詩でもなく、表現のレベルだけで即断はできないのだが、『詩学大成』卷十四「美人附麗情」には「御溝桐葉」の語を掲げ、『本事詩』の顧



況伝にほぼ沿った内容を注していたし、同書卷二十六「木葉附紅葉 落葉」には、「韓氏題詩」として于祐、顧況の二伝を併記するように、<sup>18)</sup>「御溝」と「桐葉」との連想も出来上がっていたのである。しかも「御溝桐葉」のすぐ後には、続いて「桐葉題詩」の語を挙げ、

本事詩、蜀侯繼図倚大慈寺樓、飄大——、上有詩、拭翠歛蛾眉、為憶心中事、擲管下庭除、書作相思字、書向秋葉上、願逐秋風起、天下有心人、尽解相思死、天下負心人、不識相思意、有心与負心、不知落何地、後數年、繼図卜任氏為婚焉

と記し、本事詩と玉溪編事との混乱も露わに示している。当該話をめぐる中国宋元代の複雑な状況と、本邦中世後期の題葉譚理解との間の関係については、ここに粗々見取り図が描きえたかと思われる。結局のところ、『新式聞書』の「桐葉題詩為（婚）者アリ」については、『本事詩』の顧況伝を念頭に置いての一文なのか、あるいは『韻府群玉』等を介して侯繼図伝を想起していたのか、即断の決め手を欠くと言わざるをえないが、中国の詩作法書に見える混乱を考慮すれば、そのような追究は恐らく意味をなさない。

「玉溪編事」までを引用した後、『談藪』は「余意」として「前三則本只一事而伝記者各異耳」との評を記してお

り、各々の示す人名や状況の説明に、微妙な差異はあるものの、既に見た『排韻』（『流紅記』）などへ至るまでに、木の葉に文を書いて流すという話型が、海彼においても相当の異伝を生じ、錯綜していたことを教えてくれる。そして、既に宋代にはそれら異伝が見渡され、根本は一つであると受け取られていることを、記憶にとどめておきたい。

さらには、『太平広記』に拠れば、『本事詩』から『玉溪編事』までの上記四書から引載された「題葉」譚は、本邦において一覽できたことに注意を払わねばならないのである。このような数々の題葉譚を見渡していくならば、古く平安期成立の歌学書『俊頼髓脳』と説話集『今昔物語集』に共通する、呉松孝（呉招孝）の一話も、おそらくは唐代成立の一異伝として加えうるものと思う。

### 三

本邦における題葉譚の受容を考えるには、『俊頼髓脳』もしくはその典拠が、どのような形でどのような範囲で読まれていたのかが、大事な鍵であることは疑いない。まずは一話の内容を示すべきであるが、基本的な構造は「排韻」などと変わらないことでもあり、注意すべき点のみ指摘するにとどめる。まずは松孝が木の葉を拾う場面。

……とりて見れば、柿のもみぢの赤かりけるに、詩を

書きたりけると、思ひけるより後に、女の手と見えければ、いかなる人、作りて書きけむと、この人ゆかしさに思ひになりて、……（下略）

（日本古典文学全集『歌論集』）

一つには、木の葉が「柿のもみぢ」であるとされていること。紅葉であることは、多くの説と共通するところだが、「柿」は異例である。また、既述の題葉譚が必ず示す詩の内容を、ここでは示していないことも目を引く。『玉溪編事』を除き、深宮から流れ出た詩には、「内裏ノフカイ宮ノウチニ、ミヤヅカウ身ナレバ、ドコヘモ立チ出モエセヌ」（『詩学大成抄』）ことを嘆き、「ツナガレタヤウナ」（同）己が身を愁う心情が記されていた。一概には言い切れないものの、呉松孝の拾った詩にも同じような嘆きが記されていたはずで、それを欠いては、何故に「この人ゆかしさに思ひにな」ったのか不明瞭であるし、松孝の和した詩の内容も推測のしようがない。故に、『俊頼髄脳』の中では、柿の葉を介した数奇な巡り逢いのみを眼目とする話になってしまっている。無論、これらの点が、和訳に際して生じたものか、典拠である漢籍の内容を、そのまま反映したものか、さしあたって判断の手掛かりはない。

しかして、このような漢籍典拠と邦文の記述との間に見られる微妙な関係は、ただ『俊頼髄脳』の典拠説の問題で

あるにとどまらず、以後の和歌、連歌書の題葉譚記事にも、また違った形で姿を顕しているように思われる。例えば所謂「為相注」の古今集注が記す、外金楊の娘と長包公との間に交わされた、ほぼ同様の「柿の紅葉」の題葉譚の場合（二八二番歌注）は、どのような成り立ち方を想定すべきなのか。「長包公」の名は、単に秘伝の中で「呉松孝」が崩れたものとしてよいのか、外金楊の名も捏造と済ませてよいのか等、幾つかの疑問が生じざるをえない。しかも、共に歌書であり「柿の紅葉」という設定を共有する、『俊頼髄脳』と「為相注」とであるが、「為相注」が仮に『髄脳』を踏まえているにせよ、単純に『髄脳』の説のみを基にしているものと思われないのは、女が返報の詩を見出した場面で、「為相注」は「みすてかたくて、はこの中に入てをきぬ」と、「はこ」に言及するからである。

『俊頼髄脳』には見えぬこの記述を、単なる「為相注」の創作と見做すことも、可能ではある。ただ、これが中国の題葉譚にはしばしば見られた設定であるという事実も、忘れることはできない。「置於巾箱」（『雲溪友議』）、「收貯書囊」（『北夢瑣言』）、「貯巾篋」（『玉溪編事』）、「蓄於書笥」（『青瑣高議』）などと、いくつかのヴァリエーションは当然あるし、しかも、これらは男の側の行為として記されたものであるが、これを偶然の暗合としてのみ処理する

ことは危ういのではないか。

「箱」への言及は、更に『故事本語本説連歌聞書』の一項「柿の葉の文故事」にも見える。これは、初めに引いた『新式聞書』と同じように、

韓夫人者、唐僖宗皇帝の宮女也。

流水何太急 深窓尽日閑 報勒謝ニ紅葉一

好去到ニ人間一

如此書ニ紅葉一、御溝水入。是士人于祐云者拾得、是又紅葉如此書、

曾聞葉上題ニ紅愁一 上題レ詩寄ニ阿誰一

如此書、紅葉御溝入、逆流スルヲ韓夫拾得ル。……

(下略)<sup>20</sup>

と、『排韻』に拠つたらしい漢文体の記述を有する。が、それと同時に和文体の題葉譚をも記している。和文体の話の方では、「内裏の女房を一目みて……おもひにたへかね」た男が、一方的に恋の詩をしたためたことになっており、基本の話型から崩れてはいるけれども、「柿のはの色いつくしき」を流しているところなど、『俊頼髓脳』の末流に位置すると考えられる。ところが、ここでも女は、男の詩を「箱の底より取出し」たとされているのである。そして、この「箱」についての記述が、『排韻』にも『俊頼髓脳』にも見えぬ設定である点を、注意しておかねばなら

ない。即ち、「箱」の記述が仮に典拠をもつものであるならば、『排韻』や『俊頼髓脳』とは別の資料が参照されていることを、この事実は意味しているのである。そして『太平広記』などを参照すれば、それも実際に可能なことであつた。

念のために言い添えておけば、「為相注」や『故事本語本説連歌聞書』の「はこ(箱)」の記述は、典拠なしでも付け加え可能であつただろう。そこへ典拠を指示することに、稿者の意図があるのではない。むしろ、そのこと自体は些末な問題に過ぎない。わかりきったことではあろうが、漢籍の典拠と、その和訳化された話の間には、口承、書承様々な媒介項の介入する余地がある。室町末期には概ね『排韻』典拠に収束するかに見える題葉譚の場合も、そこに至るまでには、複数の典拠との相当に複雑な交渉を経てきている可能性がある。今日、目にしうる中国側の資料だけでも、そのことは確認されようが、更には失われた資料の可能性を想定する時、典拠との距離は慎重な測定を必要とするのである。中世の書庫の闇は、意外に深いようだ。

(注)

(1) 木藤才藏氏「連歌新式注解書の研究」(『日本女子大学文学部紀要』第三十二号、昭五十七・三)、同氏「連歌新式注解書統

考」(『国文目白』第二十二号、昭五十八・三)等参照。

(2) 木藤才蔵氏編『連歌新式古注集』(『古典文庫五〇六』) 所収、宮内庁書陵部蔵御所本による。

(3) 芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』(昭五十六 思文閣出版復刊) には、臥雲日件録第五十七冊表紙の書き抜きが指摘されており、明徳四年の五山版の存在から、室町初期には禅林内に広まっていたと見てよいであろう。

(4) 内閣文庫蔵朝鮮覆元刊本による。

(5) 以下、引用は慶応義塾大学三田メディアセンター蔵、毛直方編元刊本による。この部分、林槇編五山版『聯新事備詩学大成』(内閣文庫蔵) も、ほぼ同じ。

(6) 芳賀氏注(3)前掲書。但し、『空華日用工夫略集』では応安二年追抄に、「木強」の語についての注記として、「注、木、質也、言如木石之為也、又見于韻府注也」と見えるのみであり、肝心の「韻府注」からの引文が示されているのでもなく、「韻府群玉」との同定は慎重であるべきかもしれない。また「韻府群玉」『詩学大成』いずれも、複雑な諸本の問題があり、厳密には、義堂の目にしていた書物がどのような系統に属するものか、明らかではない。「韻府群玉」については、柳田征司氏「玉塵」の原典「韻府群玉」について(山田忠雄氏編『国語史学の為に 第二部古辞書』(昭六十一 笠間書院刊)、『詩学大成』については、柳田氏『詩学大成抄の国語学的研究 研究篇』(昭五十 清文堂刊)を参照。なお、室町期の禅林における「韻府群玉」の役割については、中本大氏「本国禅林における橘吏説話の受容について——『竹林抄』所収宗御句を端倪に——」(『中世文学』第三十六号、平三・六)などの強調するところである。

(7) 但し、管見の限りでは、義堂の詩には他に用例を見ず、必ずしも好んで用いた題材ではなかったようだ。なお、用例の調査は、体系的なものではないので、本邦禅林の中でいづころから定着してきた詩材であったか、知見の限りでない。本来ならば、更に幅広い禅林詩の資料の調査をふまえるべきであろう。

(8) 柳田征司氏『詩学大成抄の国語学的研究 影印篇』

(9) '83年上海古籍出版社刊、宋元筆記叢書による。かつて、『太平記』巻一「玄慧文談事」の「昌黎が猶子韓湘」についての典故として、この「青瑣高議」が問題となったこともある(青木正児氏『支那文学芸術考』)が、書物の流入と影響力という点からしても、岡見正雄氏の指摘されたように「詩人玉屑」に拠る知識とするのが妥当と思われる(角川文庫『太平記』(一)「補注」)。ただし、以前、簡単にふれたことのある烏衣国譚など、禅林の知識と深くかわる話を「青瑣高議」が収めていることは事実だ。

(10) 「趙德麟細君王、作一絶云、晚雲帶雨掃飛急、去作西窓一夜愁、德麟因此娶之、余以為此二十八字媒也」(『王直方詩話』)とある。「王直方」は毛直方の誤りかとも思われるが、「増広事類詩学大成」には「二十八字媒」の語は確認できなかった。「玉塵」においても、「排韻」にこの一話が記されることを指摘するのみに  
(11) 『七修類稿』は、民国五十二年世界書局印行、読書記叢刊第二集、『陔余叢考』は、民国六十七年世界書局印行四版、読書記叢刊第一集による。

(12) 蓬左文庫蔵、明刊本『百川学海』戊集所収本文による。

(13) 中華書局刊本(61年新版、94年第五次印刷)による。

(14) 蓬左文庫蔵、明刊本『說郛』所収の一巻本、及び明刊本『裨海』所収の十二巻本を見た。両者の間に幾つか異同はあるが、大

きな問題はない。ただし、いずれも『本事詩』の記事とはかなり異なる。周助初氏主編『唐人軼事彙編』(95年上海古籍出版社)巻十八も参照。

(15) 「罕」字は、『広韻』(民国七十五年校正六版、芸文印書館印行『校正宋本廣韻』)に「希也」、『類聚名義抄』に「マレニ」とある。

(16) 「玉溪編事」は五代蜀の時代に成るとされる編者不明の書だが、明刊本『説郛』所収の本文は、既に逸文であったものか僅か数葉のもので、当該話は取められていない。

(17) 聯句ではないけれども、熙春には「韓夫人紅葉扇贊」の詩があり、『排韻』等により広まっていたと思われる韓夫人の題葉譚を、知識として有していたことが確認できる。「御溝水遠隔天涯依約霜紅恩露加 一片随流作媒去 始知秋葉勝春花」(『翰林五鳳集』巻十九秋部、大日本仏教全書)。ついでに漢和聯句の用例をここで追加しておくこととする。東京大学総合図書館竹冷文庫蔵『連歌和漢集』所収「於幽斎和漢聯句」二折表6・7句、

心緒旅悲商 玄(英甫永雄)

題葉妾紅怨 喜(等喜)

同じく、『古潤下国和漢聯句』三折表4・5句

かつ散にけり庭の紅葉は 旨(幽斎)

苔鎖无媒路 磯(古潤慈禧)

前者は、「題葉」あるいは「紅怨」の語を含んでおり、用例として疑いない。後者は、恐らく「紅葉」からの連想として「媒」と応じたものであらうと思われる。即ち、苔にとざされた庭には、「媒」として紅葉を運ぶ川もない、の意であらう。いずれも大島富朗氏「翻刻『細川幽斎和漢・漢和聯句』その二(下)」(『学

苑』第六百八十五号、平九・三)による。

(18) 但し、『増広事聯詩学大成』には「于祐」を「于后」と誤っている。

(19) 『俊頼髓脳』と「為相注」との関係を見る上で、幾つか注意すべきところを摘記しておく。「為相注」は紅葉の詩を具体的に示さないものの、「その詩の心はへは、内にまいるりながら、いまた御門に見えたてまつらぬ事のうれしき心をなんつゝりたりける」と解説を加えている。但し、これは『髓脳』の設定のみからでも推測は可能であらう。次に、男の返答の詩について、「おなじ柿の葉に書きて、その川の、水上に流しければ」(『髓脳』、「その河のみなかみの奥山にゆきて、ことにうつくしき紅葉をとりに、ありし詩の返事をつくりてかきてなかしけり」(為相)といずれも「排韻」のごとき逆流説は取らない。また、ふたりが夫婦となつてからのやり取り。

俊頼髓脳

為相注

女のいひけるは、「我が、物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなる事ぞ。ねがはくは、われに隠す事なかれ」。松孝、答へていはく、「われ、昔、宮のほかにして、川の流れにあそびき。水の上に、木の葉のあるを見れば、女の手蹟にて、ひとつの詩を書けり。それを見て、今日今に忘るる事なし。しかはあ	妻女外金楊か娘、問ていはく、「何事をおもふぞ、つねは物おもへるけしきのみみゆるは」ととひければ、長包公かいひけるは、「なにをかくしたてまつらんぞ、いつの年いかゝ也し時しかゝかゝる事ありしより、行ゑもしらぬ窓にまよひて、すてにいまいまとりしか、されともそこのおはしてのちは、こよ
---	--

れど、君に、かく親しくなりて後、ことのほかに、思ひなぐさめるなり」といへり。女、これを聞きて、「その詩は、いかがありし。また、その詩の和かつくりたりし」といひければ、「しかありき」と、いらへければ、女、この事を聞くに、涙さきにたちて、契りのおろかならぬことを、知りぬ。

なくなくさみにたれと、猶おりくは心にかゝりてくるしき也」といへりけり。此女あさましくふしきにおほえて、「その返しやしたりし」ととへは、「しかなり」、「さてそのかきたりけん物今迄ありや」といへは、「いま迄もちたり」とて、まほりの中よりかのかきの葉にてわか書たりし詩をとりいてたり。

所々で細かい対応を見出すことができる。ただ、両者の関係の有りようは、これだけでは断じえないと言ふべきであらう。なお、「為相注」の引用は、京都大学国語国文資料叢書四十八『古今集註 京都大学蔵』により、校訂に際して付けられた括弧等は、私の判断で省略した。

(20) 渡辺守邦氏「資料紹介 U・Cバークレー校蔵『古事類』——もう一つの『連集良材』——」(国文学研究資料館『調査研究報告』第九号、昭六十三・三)。引用に際し、読み仮名、送り仮名は省略した。但し、漢字表記はそのままとした。

(付記) 小稿は和歌文学会例会(平九・六、於日本大学文理学部)での口頭発表の一部を、加筆修正したものである。